

漢詩の話（春の漢詩を読もう）

（1）はじめに

漢詩の話をするのは、今回で三回目となります。初回（04. 8）は漢詩の歴史、形式、漢詩を作る上での約束事、漢詩の楽しみ方と注意についての話をし、皆様がよくご存知の漢詩の紹介、説

明を致しました。第二回目（06. 8）は漢詩が近代詩として成立、発展した唐、特に盛唐の三大詩人李白、杜甫、王維に絞り、その詩人の人生、魂、交遊などを含めて話をいたしましたがい三回目の今日は春の漢詩を読もうと題して十人の詩人の春の詩をご紹介しますと思います。

（2）詩人の略歴

1. 陶潜（365～427）東晋 字は淵明。江西省九江市の人。二十九歳の時から官職についたが、なかなか昇進できず、次第に役人生活に希望を失い、四十一歳の時辞職して郷里に帰った。以後は世俗を離れた田園の暮らしをうたい、酒と菊を愛する隠逸詩人として活躍した。その詩は貴族社会では高い評価をうけなかったが、唐代になって真価が見直されている。

2. 孟浩然（689～740）盛唐 一説に、名は浩、字は浩然。科挙に及第せず、襄陽（湖北省襄樊市）の鹿門山に隠居していたが、のち諸国を放浪して詩人達と交わった。特に王維といたしく、ともに自然をうたうことを得意としたので「王孟」と併称される。また李白に尊敬され、詩を送られている

3. 王維（699～761）盛唐 字は摩詰。太原（山西省太原市）の人。幼少より詩、書、音楽の才能を発揮し、十五歳で都長安に出ると、たちまち社交界の花形となった。開元七年（719）二十一歳の若さで進士に及第、以後順調な役人生活を送る一方、自然を愛し、しばしば別荘に赴き友人達と閑適の時を過ごした。また仏教を深く信仰し、その影響は彼の詩の随所にあらわれている。李白の「詩仙」、杜甫の「詩聖」と鼎立して「詩仏」と称せられる。

4. 李白（701～762）盛唐 字は太白。青蓮居士と称した。（四川省錦陽県）の人。二十五歳の時蜀を出て放浪する。四十二歳の時に召されて翰林供奉（実際には宮廷詩人）となるが讒言によって長安を追われた。以後は不遇で、放浪の生活の後、六十二歳で没した。その詩は「天馬空を行く」と称され、躍動感に富む明るい作品が多く長編の古詩、特に樂府、および七言絶句に長じていた。

5. 杜甫（712～770）盛唐 字は子美。号は少陵。襄陽（湖北省襄樊市）の人。李白と並んで「李杜」と称されている中国最大の詩人。役人として恵まれず、官についたのは天宝十四年（755）、四十四歳の時であった。しかし、すぐ安祿山の乱に遭い、その後は戦乱と貧窮のため、家族を連れて各地を放浪、失意のうちに五十九歳で没した。その詩は社会の姿を直視した現実的な作品であり、正義感、人間愛にあふれるさくひんが多い。特に律詩に長じ、「李絶杜律」とい

た。官は京兆尹（都の長官）、兵部侍郎、史部侍郎（大臣）を歴任した。その詩は晦渋、難解なものが多いが、小品の中には親しみやすいものもある。柳宗元とともに古文復興の提唱者であり、またよく後進を導いて、孟効、賈島、李賀ら多くの詩人達を門下から輩出した。

7. 白居易（772～846）中唐 字は楽天。香山居士、醉吟先生と号した。下邳（陝西省渭県）の人。二十九歳で進士に及第、ついで上級試験にも合格し、役人生活に入った。その後、翰林学士や左十遺などの要職についたが元和十年（815）上書をとがめられて江州（江西省九江市）に左遷された。のち、杭州、蘇州の刺史を歴任、刑部尚書に至った。晩年は洛陽に住み、仏教への帰依を深めて郊外の香山寺の僧らと親交を結び、香山居士と称した。閑適、感傷の詩を多作。元稹との友情は深かった。

8. 杜牧（803～853）晚唐 字は牧之。号は樊川。京兆万年（陝西省西安市）の人。（828）進士にも及第し、のち中書舎人になったが、地方官としての勤めが長かった。若いころ揚州に赴き、風流才人ともてはやされ、浮名を流した。詩は、晚唐第一としょうされ、軽妙、洒脱、機知に富む。ことに七言絶句をよくした。杜甫を「老杜」と呼ぶのに対し、「小杜」と呼ばれる。

9. 蘇軾（1036～1101）北宋 字は子瞻（しせん）塔婆居士と称した。眉州眉山（四川省眉山県）の人。役人としては、王安石の新法に反対したため、しばしば迫害を受けたが、その詩は逆境の中でもつねに明朗闊達な作風を保っていた。詩、詞、散文、書、画の各方面に才能を発揮し、料理にも強い関心を示した、天才肌の文人であった。

10. 高啓（1332～1370）明 字は季迪。青邱と号した。長州（江蘇州蘇州市）の人。博学で詩をよくし、歴史にも通じていた。洪武帝の初期に「元史」の編者の一人として南京に招かれた。三年後、戸部侍郎（大蔵次官）に抜擢されたが、辞退して故郷へ帰った。その後、友人の謀反の罪に連座して、腰斬の刑に処せられた。一説に、彼の七言絶句「宮女の図」が太祖の好色を風刺していたので、太祖の怒りにふれたのだという。

（3）読書百編意自通